

政治的な事柄を(いま)哲学すること

アリストテレス『政治学』を再読する意義の検討を手がかりとして

オーガナイザー	立花 幸司	(熊本大学)
提題者	相澤 康隆	(三重大学)
提題者	福間 聡	(高崎経済大学)
提題者	玉手 慎太郎	(東京大学)
提題者	稲村 一隆	(早稲田大学)

卑近なところから話を興せば、学術・研究をとりまく環境の変化は、政治的なものによって大いに左右されている。多くの研究者の関心事である競争的資金の制度変更はその一例であり、また入試制度や大学名称の変更などは受験を控えた高校生や学部学生にも感じ取れる例であろう。もちろん、学術・研究に限らず、およそ社会的な生活の隅々に政治的なものが関わっており、その意味では、政治的な事柄はすべての人の関心事であるといえる。他方で、政治哲学が(日本の)哲学業界の中で占めてきた立ち位置は、必ずしも華々しいものではなかった(ように思われる)。こうした現状に対しては、政治的な事柄に哲学者として取り組まないことは哲学の怠慢だとする考え方も陰に陽に常に提示されてきた。しかし、数ある哲学の主題のなかで、政治的な事柄を選んで哲学するとは、どういうことなのか。本ワークショップでは、とすれば主義主張の表明に終始しかねないこの問いに、可能な限り生産的な議論を喚起することで検討することを目指す。

このような企図のもと、四人の研究者にお集まりいただいた。まず、アリストテレスの倫理学・政治学を専門とし、昨年刊行された新アリストテレス全集『政治学』(岩波書店)の訳者の一人でもある相澤康隆氏から、アリストテレスの内側に立った視点で提題をいただく。つづけて、社会哲学を専門とする福間聡氏、政治哲学および経済倫理学を専門とする玉手慎太郎氏、政治哲学を専門とする稲村一隆氏の三氏から、それぞれがアリストテレスの外側に立つことで見えてくるものを取り入れた提題をいただく。(議論の繋がりや対比を可視化するためにアリストテレスの『政治学』への言及を各提題者をお願いしたが古代哲学のワークショップではない。)最後に、各提題を哲学することのポリフォニックな実演・実例として、政治的な事柄を(いま)哲学することについて、会場にお集まり頂いた方々と(これまで政治哲学に関心があつた方もあまりなかった方も)ともに自由闊達に検討したい。

1. 相澤康隆「アリストテレスの『政治学』における自然概念の検討」

「自然」ないし「自然本性」と訳される「*φύσις*」は『政治学』のキーワードの一つであり、本書の全体を通じて(しばしば「自然にもとづく」、「自然に反する」というかたちで)繰り返し用いられる。とくに第一巻では、「人間は自然にもとづいてポリスの動物である」という有名な言葉をはじめ、「男性と女性の間には、自然にもとづいて、すぐれたものと劣ったもの、支配するものと支配されるものという関係がそこに成り立っている」(1254b13-14)、「自然にもとづいて、ある人々は自由人であり別の人々は奴隷である」(1255a1-2)という、社会的不平等の正当化とみなしうる悪名高い議論のなかでもこの概念が重要な役割をはたしている。しかし、本書のなかで「自然」がどのような意味で使われているのかは必ずしも明らかではなく、また一貫して

同じ意味で使われているのかも明らかでない。そのため、多くの論者がこの概念をめぐるさまざまな解釈を示してきた。本発表では、『政治学』における「自然」の意味を具体的な用例を通じて明らかにしたうえで、アリストテレスのいわゆる自然主義が彼の政治思想においてどのような意義をもつのかを考察する。

2. 福間聡「ロールズはアリストテレスをどう批判しているか？」

ロールズはその長期にわたる研究において、アリストテレスに対して幾つかの批判を提起している。プリンストン大学に提出した卒業論文(「罪と信仰の意味についての簡潔な探求」)(1942)では、倫理とは人々の適切な間柄(*community*)ではなく、各個人が個別に追求する善に関わりと解釈しているアリストテレスの立場を「自然主義 *naturalism*」として批判しており、『正義論』(1971)では目的論に基づくアリストテレスの社会正義の構想を「完成主義 *perfectionism*」と批判している。そして晩年の『公正としての正義:再説』(2001)や『政治的リベラリズム』(1993)にあつては、人間の本性は政治参加において最も十全に実現されるとみなす「シヴィック・ヒューマニズム *civic humanism*」の立場をアリストテレス主義に基づく正義の包括的構想として批判している。本発表ではロールズによるアリストテレスならびにアリストテレス主義への批判の変遷ならびにその批判に通底しているロールズの倫理観とは何であるのかを検討する。

3. 玉手慎太郎「ポピュリズム・自由・有徳さ」現代の政治の一大トピックであるところのポピュリズムが、その正統性の是非はともかく、人民の(ある意味で)不適切な意思が政治に反映されてしまうという問題であるとすれば、今ふたたび、多数者支配の害悪を論じたアリストテレス『政治学』に関心が向かうこともまた一つの必然であろう。しかし、単なる政治制度論ではなく徳倫理と密接に結びついたアリストテレスの政治理論が、あまりに目的論的でありすぎる(特定の善の構想を押し付けるものである)ならば、多様性が深まった現代社会において得られるものは少ないだろう。本発表ではアリストテレスの政治理論を、現代倫理学の知見も踏まえつつ、反ポピュリズムの文脈で読み直すことを試みるものである。特に、現代の民主主義論の一つの論点である、人々の価値判断をありのまま政治に反映すべきか否かという問題について、「徳」を通じた欲求の制約に依拠する形での解決方法を、アリストテレスに引きつけつつ論じる。

4. 稲村一隆「政体分類の方法論と本質主義」アリストテレスの本質主義は、現代の形而上学で盛んに研究されている。さらに、近年の社会科学方法論では本質主義が理論的支柱となっており、そこでは規範理論に位置づけられるヌスバウムのケイパビリティ・アプローチもこうした本質主義的説明の一形態として捉えられている(Gary Goerts, *Social Science Concepts*, pp. 15-19, 27-30, 59-62)。しかし問題点として、多様な変異を含む種の一つの本質を定めて、他と境界づけることは可能なのか、という点がある。そこで本発表の問題設定は、種の本質に訴えることによって、どのように種内部での多様性を説明できるのか、その説明方式を探求することである。政治学という、非常に多様な現象を扱う学問でも、アリストテレスは生物学の発想を利用して多様な政治体制の分類を行なっている。本発表では政体論を素材にしてその方法論を検討することで、本質主義的説明方式を擁護したい。検討対象とする『政治学』のテキストは、第1巻第1章 1252a17-23、第3巻第8章 1279b34-1280a6、第4巻第4章 1290b23-37、第6巻第2章 131740-1318a6 である。